

A 語句の意味と読み

- (1) たびたび・何度も / 漢文では「数」を「しばしば」と読む。「数える」ではない
- (2) もくし／目で合図する・めくばせする / 名詞の「め」ではなく動詞として使われている
- (3) 生まれつきの性質・人柄 / 「為人」で一語。「人となる(成長する)」ではない
- (4) そうでなければ・さもなければ / 前の内容を受けて「もしそうしなければ」と言い直す形
- (5) 鳥が翼で覆うように、自分の体でかばい守る / 「翼」は「翼のように」というたとえ
- (6) どうであるか・どんなありさまか(状態・様子をたずねる) / 一般に「何如」は状態、「如何」は方法・処置を問うとされる。お使いの教科書の説明に合わせる

B 句法

- (7) 前の内容を「～すること」と体言化する助字。「示すこと三たび(＝三度示した)」となり、読まずに捨てる置き字ではない。／直後が「三たび(＝三回)」という回数。前を「～すること」とひとまとまりにしないと「三たびす」につながらない。※この部分の送り仮名・読み方は教科書によって差があるので、お使いの教科書に合わせる
- (8) 「どうか～させてください」と、自分から相手に許しを願い出る言い方(願望を表す言い方)。ここは項王に願い出て剣舞をする、という手はずを、范増が項莊に指示している部分。／のちに項莊が「請ふ剣を以て舞はん」と実際に願い出ている
- (9) 再読文字。「且」をまず「まさニ」と読み、下から返ってもう一度「～(せ)んとす」と読む。「今にも～しようとする」の意。／「将」も同じ「まさニ～ントす」。「当(まさニ～ベシ)」と混同しない

(10) 受身の句法(「為A所B」＝AにBされる)。「虜とする所と為る」で「捕虜にされる」。／「為」を「ナル」と読んだら受身を疑う

(11) ～するための手立て(材料)がない。ここは「座興にするものがない」。／不可能の「～を得ず」とは別の形。もとの意味は「手立てがない」

(12) 不可能を表す句法。「～することができない」。「項莊は(沛公を)撃つことができなかった」の意。／「不得～」「不能～」はどちらも不可能

C 主語・指す内容

- (13) 項莊 / 范増が呼び寄せて命じている相手
- (14) 沛公(劉邦)側 / 捕虜にする側は本文に書かれていない。項莊たちが誰と敵対しているか(誰に負けたら捕虜になるか)を考える
- (15) 項莊 / 直前の「項莊剣を抜きて舞ふ」を受けている
- (16) 沛公(劉邦) / 樊噲にとっての主君。※「之」を項莊と取り「項莊と刺し違える」と読む説もある。お使いの教科書の注に合わせる

D 口語訳

- (17) (項王は)黙りこんだまま、何も応じなかった。／「默然」＝黙りこんださま。「応ぜず」＝返事をしない
- (18) (わが君は)人柄として、むごいことをするにしのびないのだ。／別解＝(わが君は)生まれつきの人柄として、思いきって非情なことができないのだ。も可。／「忍びず」＝非情なことをするにしのびない・思い切ってできない
- (19) 今にも(沛公に)捕虜にされてしまうだろう。／再読文字(今にも～しようとする)と受身(～される)を、どちらも訳に出す
- (20) その(項莊の)狙いは、いつも沛公にあるのだ。／「意」＝心づもり・狙い。文末の「なり」は断定

E 内容・記述

(21) 身につけていた玉玦（一部が欠けた輪の形の玉）を挙げて示した。「玦」の音が「決」に通じることから、今こそ決断して沛公を殺せ、とうながす合図とされる。／「三たび」＝念を押すほど強くうながしたということ。玦と決を結びつける説明は教科書によって扱いが違うので、お使いの教科書に合わせる

(22) 范増の再三の合図に気づきながら、沛公を討つ決断ができずにためらっている。情に厚く非情になりきれない反面、大事の場面で決めきれない優柔不断さが表れている。／このあと范増が項莊に言う「君王人と為り忍びず」(⑤)という項王評とあわせて読む

(23) (必須要素は二つ) ①項伯は項羽の叔父でありながら、張良への恩義から沛公側に通じていたこと。②項莊の剣舞が沛公暗殺のためだと察したこと。この二つから、自分も舞に加わり、身をもって沛公をかばって斬らせまいとした。／項羽の陣中に沛公を守る者がいる、という緊張が読みどころ

(24) 主君である沛公の危急に際し、自分の命を投げ出してでも運命を共にしようとする、忠義に厚く勇猛な人物。※参考＝この直後、樊噲は剣と盾を手にして軍門に踏み込んでいく。／「命を同じくせん」の「ん(む)」は意志を表す

F 文学史・故事

(25) 『史記』／司馬遷／紀伝体(本紀・列伝などから成る)。※参考＝「鴻門の会」は「項羽本紀」に収められている。／「紀伝体」の「紀」＝本紀、「伝」＝列伝

(26) 表向きは和やかな宴・会見でありながら、その裏で相手の命をねらう陰謀や駆け引きが渦巻く、油断のならない席のたとえ。／宴の席に殺意が隠れている、というのがこの語の核

(27) 秦を滅ぼすためにともに戦ったが、劉邦が先に秦の都・咸陽を落としたことに項羽が怒り、両者は衝突寸前となった。そこで劉邦が項羽の陣営である鴻門に出向いて釈明したのが、この会見である。／劉邦はのちの漢の高祖

【現代語訳(全文)】

范増はたびたび項王に目くばせをし、身につけていた玉玦をかがげて項王に示すこと、三度に及んだ。しかし項王は黙りこんだまま、何も応じなかった。范増は席を立ち、外に出て項莊を呼び寄せて言った、「わが君はお人柄として、むごいことをするにしのびないのだ。おまえは中に入り、進み出て杯をささげ、祝いのあいさつをせよ。あいさつが終わったら、(どうか剣舞をと) 願い出て剣を持って舞い、それに乗じて沛公をその席で斬りつけ、殺してしまえ。そうしなければ、おまえたち一族は、みな今にも(沛公に) 捕虜にされてしまうだろう。」と。

項莊はそこで中に入って祝いのあいさつをした。あいさつが終わると、項莊は言った、「わが君が沛公と酒を召し上がるのに、陣中には座興とするものがございませぬ。どうか剣を持って舞わせてください。」と。項王は「よかろう。」と言った。項莊は剣を抜き、立ち上がって舞った。項伯もまた剣を抜き、立ち上がって舞い、いつも自分の身で、鳥が翼で覆うようにして沛公をかばい守った。そのため項莊は斬りつけることができなかった。

そこで張良は軍門まで行き、樊噲に会った。樊噲が言った、「今日の(宴の) ことはどうなっていますか。」と。張良が言った、「たいそう差し迫っている。たったいま項莊が剣を抜いて舞っているが、その狙いはいつも沛公にあるのだ。」と。樊噲は言った、「これは危急だ。わたくしにどうか中へ入らせてください、そして沛公と生死を共にいたします。」と。樊噲はすぐに剣を腰につけ、盾をかかえて軍門に入っていった。